

令和２年度 第１回 伊那市総合教育会議会議録

- ◎招 集 年 月 日 令和２年６月１８日（木）
◎開 催 日 時 令和２年６月２２日（月） 午後１時３０分～午後３時００分
◎場 所 伊那市役所 庁議室
◎出 席 委 員 白鳥市長、教育長、北原教育長職務代理者、田畑教育委員、原田教育委員、黒河内教育委員
◎欠 席 委 員 なし
◎出 席 職 員 馬場教育次長、福澤学校教育課長、北林生涯学習課長、早川企画調整幹（市誌編さん）、北澤指導主事、小松指導主事、有賀伊那中学校長、伊藤教育総務係長

１ 開 会

教育次長

定刻となりましたので、ただいまから今年度第１回目の総合教育会議を開催してまいります。始めに市長からご挨拶をお願いいたします。

２ 市長あいさつ

市長

コロナに始まった今年ですが、日本はだいぶ小康状態と言われながらも産業界、教育界、いろいろな影響が出ており、改めて今後の日本の弱点が露呈されたのかなという気がいたします。

今回コロナによって、Zoomを使った新しい授業の在り方等を実践していただきました。伊那市の ICT、Web、Zoom を使った取り組みは進んでいるとの評価をいただいているわけですが、それも ICT 活用教育推進センターが機能し、スキルの高い先生方がやってくださった一つの結果で、非常に感謝しているところです。今回のコロナによって生まれた新しい教育の姿を改めて検証し、これからの教育に活かしてもらいたいと思います。

今日はいろいろな事例、またコロナ禍での現状の課題を洗い出してもらいながら会議を進めてまいります。よろしくお願いいたします。

教育次長

ありがとうございました。続きまして教育長よりお願いいたします。

３ 教育長あいさつ

教育長

今年度第１回目の総合教育会議です。教育に関わる基本線や、学校、子ども相談室等の現場が直面している課題について、市長とともに考えることができる大変大事な機会を持てていると感じているところです。

本年４月に新入生を迎え、そこから１か月半の臨時休校に入るという大変な年度スタートになったわけですが、その間に ICT を活用した学習支援や、指導の在り方についての今後の方向性を示した「臨時休業中のオンライン学習支援ガイドブック」を、足助先生や ICT 活用教育推進センターの先生方を中心にまとめることができました。成果を整理しながら課題を解決していく取り組みについて、考え合うことができればと思います。今日おいでいただいている先生方にお礼を申し上げながら挨拶いたします。よろしくお願いいたします。

教育次長

ありがとうございました。それでは協議事項に入りたいと思います。ここからは市長の進行でお願いいたします。

4 協議事項

(1) 令和2年度伊那市教育委員会運営方針について

市長

今回のコロナのよって、社会の仕組みが大きく変わるということが前提にあり、地方で暮らすことが極めて当たり前で人間らしい生き方だということが証明されつつありますので、地方創生や移住定住、受けられる教育の内容などの議論を続けていきたいと思います。また、教育のスタートの遅れをどのようにリカバリーするかという点も、議論の中で考えていただければと思います。

それでは最初に「教育委員会の運営方針」についてご説明をお願いします。

教育長

「令和2年度伊那市教育委員会運営方針」について説明

市長

教育委員会の運営方針の話をしてもらいましたが、皆さんからご質問、ご意見がありますか。

無いようですので、次の(2)「長期休業中のICTを活用した学習支援について」に入りたいと思います。

(2) 長期休業中のICTを活用した学習支援について

伊那中学校長

「長期休業中のICTを活用した学習支援」について説明

市長

ありがとうございました。実際に現場で指揮を執られ、先生方と一緒に取り組んだ実例の話聞いて、本当に勉強になりましたし、ICT教育の可能性をますます感じました。質問もたくさんあると思いますが、どうぞ自由に、これからの可能性、あるいは提案でも結構ですので、お話いただければと思います。

教育委員

今までなかなか進まなかったのですが、先生方はこんなにできるのではないですか、と感動しながら見させていただきました。

ネットの環境が家にない子どももいるので心配はしていたのですが、空き教室へ来たい子どもは来て、家で見たい子どもは家で、という「自分で選ぶ」という自主的な能力もすごく育っているのではないかと感じました。

教育委員

やはりトップのリーダーシップが大事だと思います。あとは「環境」により今回ここまでの大きな躍進をされたのかなと思っています。

この先の話になるのですが、実践しながら自分自身の教育ツールを手に入れた先生方が、伊那市全体で今回のコロナ禍を捉えて、「こういう教材も提供できる」「こういうチャンネルも作れる」という先生方がネットワークを作り、自主発信できたら、と思います。授業の中で使うツールでもいいですし、ホームページ上の先生が推奨する学習プログラムや YouTube の番組を、学校に来られない子がアクセスしたり、通学している子は復習に使ったりできるツールがあると良いと思います。学校や地域を超えたいろいろな意味で協力するツールとして発信できるような学校のホームページがあると、学校へは来られないけれど家で学習を深めたい子は、どんどんアクセスしてくる。学校のホームページの在り方をここで見直す必要性あることを発表の中で非常に感じました。

また、Zoom の利便性を学校の先生が非常に勉強したのはわかりますが、アクセスしてくる子どもたちのための Zoom 教室はあったのでしょうか。提供する側の教員のノウハウだけでなく、子どもたちがこれからの社会とアクセスするツールとしてずっと使うことも予想されます。クラブ活動や、それぞれの子どもたちの繋がりの中で、子どもたちの世界観の中における Zoom の有用性と危険性も含めて教えていく。そうするとアクセスする側も教えている先生側も、Zoom を熟知しているとお互いにもっと進んだ学びの深まりを提供できる。「先生、自宅にこんなタンポポがあったのですが、見えますか？」というように、子どもたちの方から画面を共有してくるようなことが起こってくると、子どもたちの将来性にも非常に生きてくるのかなと思います。

Zoom は採用面接にも使われていますし、今までコミュニケーションという言葉で全部塗りつぶされていたことを、この Zoom でやるとよくわかるのは、自己開示能力です。画面において表情や表現力がないと、その人の本当の部分が能面のような画面になってしまうのですが、その中で自分自身を自己開示しながら周りにわかってもらう、ということが安心感に繋がるのです。

何人かの先生がやっていましたが、授業で画面に向かって喋っているときに、どんな形でその場を盛り上げて熱を伝えるかということも、これから子どもたちが育っていく中で大きなコミュニケーション能力として問われる時代になってくるので、受け身だけではなく、授業に参加しながらそのツールを使う中で、自分自身をアピールする能力を子どもたちが発信していくという部分も工夫してもらえると、非常に双方向の理解が深まるのではないのでしょうか。

市長

校長先生は子どもたちからのオファーやレスポンスの中で、何か面白いと感ずることがありましたか？

伊那中学校長

はい、登校が始まって全校集会が開けないという状況がありましたので、生徒会の方で Zoom を使った生徒総会を企画しました。生徒の方で主体性をもち、私は一参加者として全体に発信させていただいた、という取り組みを本校でも行いました。

市長

他にはどうでしょうか。

教育委員

私も大変感動しながら拝見しました。質問ですが、ホームページに先生たちが作成された動

画を掲載されていますが、伊那中学校の生徒ではない子どもが見ようと思えば見られるのでしょうか。

伊那中学校長

実は今回、著作権の問題が頭をよぎりました。先生方の使用しているものが配信をして良いものかどうかということについて、常に相談を受けて発信していますが、心配がありましたので、本校のホームページの「オンライン学習」のところをクリックすると、パスワードを聞かれるようになっていました。そこで私どもが提供したパスワードを持っていない者はその時点でブロックされ、パスワードの提供を受けた者だけが視聴できるという形を現在はとっております。

教育委員

ありがとうございます。著作権の問題もあると思いますけれども、可能性とすると、不登校で学校へ行けなくても授業を受けることができるし、もっと言えば自分の中学校の先生の説明はよくわからないけれど、伊那中の先生の説明を聞いたらよくわかる、ということがあってもいいかもしれません。相性がありますからね。いろいろな授業や、いろいろな先生の同じ授業を比較して受講することができるのは、可能性としたらいいのかもしれないですし、時間外に見ることができるのも素晴らしいと思います。著作権ですとか、市内の子どもであれば視聴できるようにすることについては、事務方の整備が必要だと思います。

もう一つ質問ですが、早速伊那中のホームページを見せていただきましたけれど、PTA の部分に関して割といろいろなものがたくさん載っていました。ホームページを、情報を蓄積して整理して保存する場所と考え、細かい情報をホームページ上に載せていく。高遠小学校も高遠城址公園の駐車場整備などがあるのですが、駐車場の誘導や花見の見頃、雨天時はこうしたなど、安全に関したことは全部、写真とともに小学校のホームページの中に入っていると、担当の先生の仕事大幅に減ると思います。

そういった使い道に関して、「これからもっとこんなことができる」など、可能性があるようでしたら教えてください。

伊那中学校長

ホームページの活用ということで、PTA に関しては、最初はホームページを使わずに情報発信をしていましたが、保護者の方たちが完全に今回 PTA 活動ができませんでしたので、きちんとした形で全員が情報を受けるという点ではホームページがベストだということになり、今日何時間目にどのクラスは何をやっている、居ながらにしてスマホで見ることができるよう、今アップしております。そういったような活用をリアルタイムでしていくということが大事なかなということと、やはり記録として残っていますので、そのときに見ていなくても、子どもから親に伝わらないような情報もありますので、そういう点では非常に有効性があります。

それから、学校にはまず教科担任がありますので、自分以外の先生が自分のクラスに関わるということに対する抵抗感が実はあるのですが、今回、全部取っ払えるチャンスとなりました。必然的に 1 対 1 対応のクラスはできませんでしたので、先ほど見ていただいたように 4 クラスを同時配信していますので、教科担任以外の先生の授業を今回見ました。そこで他の先生たちも、自分の教えている生徒以外のクラスにも情報提供することが校内で広がってきたというぐらいのレベルで、それ以上というところちょっと難しい。ただ教科書会社からはそういうコンテンツがたくさん出ているので活用したいと考えています。

市長

まさに今のところがこれからの教育、授業のあり方に一石を投じるところだと思います。ただ伊那中学校のような一定規模の学校ではこういう活動ができたけれども、小規模の中学校、例えば長谷中や、高遠中などではできないということになれば、一緒に一つのブロックの中でそういう授業を作って発信をする。全ての授業か、あるいは比較的つまずきやすい理科や数学や英語などを共通のコンテンツで、理解が進んでない子には、この教科担任のそれぞれの学校の先生たちがサポートに入って理解を増してくるということもあると思います。だから本当にホームページのあり方もそうですが、授業のあり方そのものをよく議論をしてやっていくのは非常にいいことかなと。教え方の上手い先生と苦手な先生もいるだろうし、生徒との相性もあるかもしれない。また、教え方よりもおだて方がうまい先生もいれば、別の能力のある先生もいる。教科書に沿って、総合力で教えることというのは決まっていることなので、そのところを誰かがやって、あとはサポートして生徒が全てを理解していくような形ができれば、生徒にとって一番いいのかなと思います。

あとはコミュニケーションの取り方。なかなか生徒同士ではコミュニケーションが取りにくい子どもがいるかもしれない。そうしたところをサポートしてあげることで、その生徒が授業だけではなくて人生の中でそういうスキルをだんだん上げていくことができれば幸せだろうし、そのことはこれからの Zoom だけではなくて ICT の教育の中でさらに進めていく一つの理由であるのではないのでしょうか。

教育長

今言っていたことを振り返ることになりますが、この資料 9 のところにオンラインの指導をしてみて先生方が感じたことをまとめてくださっています。

一番左下、特に若い先生方にとっては、と書いてありますが、具体的にどのような言葉を述べられていますでしょうか。先ほどの 3 学年の先生方の合唱は非常に感動的でした。

「先生方の気の持ちようが子どもたちを育てるのだ」、そういうとらえ方も作っていかれているのではないかな。そんなことを感じながらお聞きするのですが、どうでしょうか。

伊那中学校長

実はその部分に関しては両面があるのかなと感じています。「こんなときだからこそ、子どもたちに何かをしてあげたい」という気持ちで、おそらくあの動画ができたのかなと思います。同時に一方では、これまで自分たちが教師の持っている価値観が崩れていっているような気もするという声も実はありました。例えば、学校に来るということを資産として、元気な挨拶をしてみんなでスタートしようといった価値観が、若干これまで私達が大事にしてきたことと違う方向に進んでいくのかな、という不安感が、結構経験値の高い先生たちから聞かれてきたのも、一方にあったことは事実です。そのようなところを不安感や課題として載せていますが、先生方が本当に揺れ動くと言うか、そんな時期だということを実感しています。

市長

実際、そういったことは現場ではあると思います。自分の今までの人生観とか、職業観、全く違う世界が始まって、自己否定の部分がありますよね。冒頭で教育長の話にあったように、やはり 1 人 1 人に届くというか、教育はその子どもたちのためにあるので、子どもたちが成長していけば、先生方の役割は果たせるのではないかなと思うので、だんだん思考回路を変えていくことが大事になるのではないかなと思います。

教育長職務代理者

とても素晴らしいと思ったことが二つあるのですが、一つ目は、この組織としての取り組みですね。実学でまずやって、そして修正し、さらに作っていくと、先生方の本当の力量アップになるのではないかと思います。

二つ目は、「自ら学ぶ」という視点をぶれずにやっていること。これがなかったらオンラインであっても対面であっても、私達が本当に子どもたちを育てることや成長させることにはならないのではないかと。そういうことを思ったときにこの二つは学ぶべきことだと思います。

今後のことについて、いわゆる「示す」教材だけだったら、お互いが示し合うだけですが、今回の伊那中は、その動画を通して、本当に教師の持ち味を学び合うというところがすごく良かったと思います。

これを大事にしながらコンテンツをどう共有するかということについて、少し進んではいると思いますが、足助先生から教えていただけるとありがたいです。

足助

コンテンツの共有ですね。今回、推進センターで捉えているのは、とにかく子どもたちと繋がろうということです。スクールタクトの場合もあるし、Zoom もあるのですが、子どもたちが先生の問いかけに対して繋がってきたときに、先生が本当に安心する、子どもも安心する。だから、配信するのは教材じゃなくて安心感なんだよ、という話はしていました。

その中で、例えば他の地区や他県では1日100本出す取り組みもありますが、教材をただ出すだけではよろしくない。やはり整理して、「NHK For School」など、「これは良いコンテンツだよ、先生は推奨するよ」という出し方がある。それを見た子どもたちが、こういうことを学んでいくのだということを担任の先生と共有する。教科担任制というところをきちんと分けていって、目の前にいる担任の先生なり教科担任の先生が子どもに伝えられることを大事にしています。推進センターでは3月から5月、子どもたちが来るようになるまで、現場の先生方といろいろな情報を共有して、「こういうコンテンツがありますよ」ということは提供しましたし、Zoom やスクールタクトの使い方についても連日研修を行ってきました。今回の伊那中のように実践が進んだところもあり、いろいろな段階に進んでいます。

でも小学校ではなかなかそこまではできません。低学年のお子さんには情報をどう提供するかというと、伊那西小の場合ですが、1年生の子たちには親御さんがついて、紙を見せながら、「犬は何匹いるの」と問いかけ、「3匹」と返ってくる、そういうやり取りをしながら学校と繋がっていることを子どもが感じ、親御さんも感じ、先生も安心する。そういう安心感をやり取りする場面をきちんと作っていくことが大事だなということで、推進センターとしてもそういうスタンスで行ってきました。

教育委員

今、正におっしゃったとおりで、使えるツールが増えて可能性が広がったと思ってくれる先生が増えたらいいなと思っています。先ほど院内学級の話が出たのですが、「オリヒメ」というものをご存じですか。最近NHKでも取り上げられていますが、小さな顔や手が動く、自分のアバターのようなロボットがあるのです。例えば病室にいる子が、自分のロボットが教室の席に座っていれば、ほかの生徒もそこに人がいるという認識になる。学校にいる生徒が休み時間中に話しかけると、病室にいる子は学校にいる生徒とコミュニケーションを取れるという。価格的にいくらぐらいするのかわからないですし、市内の学校の通信インフラが整ってないとで

きない話なのですが。電子黒板やいろいろなものができてきている中で、病室に居ながら学校にいる体験が、用意してあげることによってできるという話になる。ロボットを持って行ってあげれば、修学旅行や遠足へも一緒に行った気分になる。その辺も次のステップとして、どうしても事情があって来られなくなってしまっている子ども向けに提供して、教育効果も検証してみることがこれからは大事なのです。ハード的なものも安くなってきているので、いろいろな可能性が増えてくれば、という提案です。

市長

可能性をいろいろな方向から見出すことはとても大切だと思います。今回、伊那中学校の取り組みは、市内の中学校で今後どのようにしていくか、学校単位なのか、全体なのかブロック単位なのかエリア単位なのか、その辺りのことを議論していかなければいけません。

もう一つ、前々から言われている、先生方の働き方改革について。夜昼なく働き詰めで休みもない、それが当たり前できていたのを、みんなでシェアリングといいますか、分担することによって時間が取れる可能性がありますので、そうしたことで先生たちの働き方改革も含めて、今回の ICT 教育というものを考えてもらいたい。

それから先ほどからの「学校と繋がる安心感」というのが一つのキーワードだと思いますが、遠くても近く、また温かさが伝わってくるような、そうした機器の活用の仕方も今後検討が必要かなと思います。

また、小学校ではどのようにしていくか、次の段階として研究しながらまた形に持ってってもらいたいと思います。

これについては、推進センターなのか、教育委員会なのか、そういったことを中心に考えるチームがあるのでしょうか。

教育長

今日の話し合いを見ても、いろいろなところに可能性が見出せてきています。一方で「ここはちょっと大事に考えていかないといけないぞ」という課題も見えてきています。情報教育を推進する委員会、非常にしっかりした組織がありますので、やはりそういう中で返しながら、場合によってはそこに新しい部会を立ち上げるというようにしながら成果を生み出す。やはり課題を大事にしながら検討していく。

市長

委員会の中でいろいろな意見を出してもらえれば。気になったところは先生方の自己否定のようなものがあって、そこに進んでいってしまうとまずいし、逆にそうした思考を逆転させて、別な方向に行くこともあるかもしれない。そういったことも一つの検討項目かもしれない。一番大きなことは、子どもたちの理解を近づけるためのツールなので、そうしたことをするためにどうしたらいいか様々ありますから、その委員会の中で至急検討を始めてもらいたい。また検討内容について、各学校の先生たちや支援センターの先生も含めて意見をもらって、次の段階に入っていく。そのようなことでやっていくべきだと思いますがどうですか。

指導主事

ウィズコロナとアフターコロナのところで、学力向上検討委員会と ICT とで接点を作ってやっていかなければいけないなと思いました。学力向上検討委員会は例年 7 月から結果が出て、そこからスタートするのですが、今年は全国学調もなかったもので、今年のテーマは何にしようかなと考えていましたので、市長のお話を聞きながら、ICT の部会と教育総務の方と接点を持

ちながら合体させて、伊那市の子どもたちのためにということで。今、構想がひらめきつつあるところです。

市長

スタートについて、学校ごと、校長先生も含めて思いが違うというのは、平等からスタートしなければいけない、「よーいドン」でスタートラインに皆で揃っていないとできない、という思いから、一歩が出なかったところもあると思うのです。

指導主事

うまくいかない学校はみんなそうです。

市長

伊那中みたいに学校に来てもいいぞ、伊那小学校は伊那西小学校で勉強してもいいぞ、環境がないところはやり様があるのではないかな。そんなところから始めていかないと先に行かないなと今回つくづく思いましたので、次の段階へそろそろ入っていくということでまいりたいと思います。

指導主事

伊那中学校が若手中心の活性化チームを立ち上げた。そして試行錯誤しながらこれをやった、ということが、多分他の学校で真似できなかったことなのだろうと思います。画面に出てきた先生方の中にはベテランの先生方も結構いたのですが、「みんなでやるぞ」と言って立ち上がっていった。それを他の学校にどう広めていけばいいのかなということを考えていました。

今回のことを経て、授業そのものについての議論が必要になるだろう。そして、温かさが伝わるような教育。その二つのことが引っかかっています。今回のこの Zoom やスクールタクトを使うことを通して、子どもの生活帳が打ち込みによって、担任にポーンと入ってくる。それは朝でなくて夜のうちに、その担任はその場で返事を書いてアドバイスする、質問も出てくる。そして答えも返ってくる。そういう繋がりが初めてここでできたんですよね。それは不登校の子たちへの対応をまかない、その温かさの伝わる教育ということだと思います。

もう一つ、授業そのものについては、他の学校と、という話もありましたが、期末テストを伊那市で同じものを作って、教科で先生方が集まってできないかという話がいづらかあった年があったのですが、なかなか難しい。

でも今回のこのことを通して、テストはどうでもいいのだけれども、その授業のあり方を議論する場が提供できる機会になったのではないかな。評価というのは、考える機会になる。それが学力に繋がるとは思いますが、ICT をやっていたら学力が上がるとは全然思っていなくて、そうは言っても先生と生徒、その中で学力がある。でも ICT をどう生かすか、ということの議論がさらに進んでいけばいいのかなと思います。

市長

ありがとうございます。私も小学校中学校高校と自分の人生を振り返ってみた時に、途中でつかかるときが結構あるんですよね。さっき因数分解があったのだけれど、そのときは面白かったけれど、例えば連立方程式は「あれっ？」と思ってまた勉強し直さないと授業がわからなかったり。小学生にしてみると、分数の足し算、引き算とか、掛け算、割り算とか、そこでつかかって「もう算数なんかいやだ」と言って学校に来られなくなってしまう。だから、そういう子どもたちの課題解決には、これは極めて有効なのかな。全ての授業をこうした ICT に

すぐに置き換えなくても、つまずきやすいような授業からまず入ってくるっていうのもありではないかと思っています。先生と繋がるということは、どんなに安心かということも含めて、新しい時代に入ってくる。

もう一つは、先生たちが働き詰めで、常にテンパっていると新しい発想が出てこないのも、やはり働き方にゆとりを持って、その中でまた新しいアイデアを出してもらおう。そういうような形にもってってもらおうのが一番いいのではないかと思います。

もうすぐ3時ですけども、とりあえずこのことについてはまた議論するときがあると思います。またそのときをお願いをしたいと思います。まずアクションから始まるということ、失敗してもいいからまず始めよう。その考えを常に持ちながら新しい取り組みなので、失敗は当然あると思います。そんなことを恐れていたなら何にもできないので、もう失敗しても構わないのでどんどんやっていきましょう、ということでこのことについては次の委員会の方に持ち上げて、たたき台を作ってもらって、さらにそこで部会等をつくりながらやりたいということをお願いをしたいと思います。

(3) その他

学校教育課長補佐

こちらから特に用意はありません。

市長

委員の皆さんからはどうでしょうか。例えばキャリア教育、ちょっと形が変わるとか。

教育委員

理事会の現状を含めて、お話をさせていただきます。本当にコロナがどうなるかわからない中で、伊那市中学校キャリアフェスをどうするかということで、議論を進めさせていただいております。

先日各方面いろいろと調整させていただきながら、何とかして、初めはZoomでやろう、ウェブで開催しよう、というご意見もありましたが、何が届かないかというと、やはり熱量が圧倒的に足りなくなってしまうということと、子どもたちは地域の大人と触れ合いながら、地域の郷土食を食べるという楽しみや、他の学校の子どもたちとリアルに肌を触れ合わせたいという思いが非常に強かったので、11月12日を開催日としては固定させていただいて、2ないし3ヶ所での分散開催で調整しております。やはり一堂に会して約650人の自分たちの数の実像も含めて体感したいという気持ちがあるので、そこを代替するために各会場をこのウェブで繋いで一体感を出すということで、リアルとネット上というものをうまく融合させた形の中で、例年と変わらない、もしくはそれ以上の体験をしていただきたく、準備をさせていただいているところでございます。

あと、地元の産業紹介も大事なポイントです。人と人との出会いも大事なのですが、「新産業への関わり」という意味合いで、新しい次世代の産業との接点を子どもたちに提供できるような仕掛けを担当職員の方と調整しています。

ということで、実行委員会の中では、11月12日に行いますということと、それぞれ会場開催になりますが、極力リアルでやっていこうとのことで、各学校も含めて調整しております。7割ぐらいの要望の中で固まっていますが、もしここでご意見やご要望等あればお聞きしたいのですが。

市長

ではまたあったらということで。他にはどうでしょうか？

5 閉会

市長

本当に日本中が悩んでいる教育現場のあり方、コロナの時代のあり方、ここで伊那中学校の事例を出してもらい、私達も本当に感動しました。取り組みが一つの形になって、子どもたちのためになっていくという、現場の悩みも苦しみも含めて見させてもらいました。ぜひ学校の先生方にもお礼を伝えてもらいたいと思います。

また足助先生にも委員のように様々な部分でサポートしてもらっております。これはまだ地についたばかりで、これからが本番だと思いますので、いろいろな意見を出してもらい、時代の先端の事柄を上手に取り組みながら、全ては子どもたちのためにやってまいりたいと思いますのでよろしくお願いいたします。ありがとうございました。